

●西門より手荷物検査受け終へてネオ・バロックの建物に入る

河村郁子

タイトルを「赤坂迎賓館」とし、一連、建物、内部、主庭と見学し、歌で案内したもの。その二首目。さいしよの歌で、迎賓館の断りを入れている。同号短評で、迎賓館の一般公開に参加したこと、建物の由来、経過、高校生のときは国会図書館であり、また、赤坂離宮だった戦前に、建築マニアの父親に連れていってもらったこと、建築様式について、など語っている。国宝でもあり、手荷物検査もまた、受け終へて、と手続き感も首肯される。読み手も眼をつかう。

「花鳥の間」の大シャンデリアはフランス製 壁に日本製の七宝焼

●うしろより吹かれ秋風と思ひたり

谷垣満壽子

さいしよの句「右手真直ぐ選手宣誓天高し」と、方向感はあるけれども、うしろから、とやや受け身。五句目「まとまらぬ一事のありて鯛雲」にも、その次の句「しつかりと生きるは難し虫時雨」にもやや停滞感がある。

面白いと思ったのは、この句。生活の継続性がみえる。その次の句の、君、は亡夫のことか。

マンションは建たぬままなり草紅葉

水澄むややつばり思ふ君のこと

●行く秋や鵜松明樺の灯を点す

新野祐子

鵜松明樺はカバノキ科カバノキ属の木。少々濡れても燃えることから、その樹皮は松明にも使われ、鵜飼いの松明（鵜松明）から転じてうだいと名付けられたという。

さいしよの句の、竹の春、も秋の季語で、全体が秋の句。ここで灯を点す、は鵜松明から受け渡された表現と読む。時間の経過感も明らか。後ろに傾ぐ（三句目）、から、前世より、になめらかに繋いで、「前世より月の満ち欠け見よという」（直木賞を岩波書店の本で初めて受賞した）佐藤正午の『月の満ち欠け』を読んだ。生まれ変わりの話でもある。

●にんげんはいつほんのくだ安堵すれば天然酵母のベーグルを買ふ

布宮慈子

にんげんは一本の管（くだ、一首目、二首目）、はやや硬く、にんげんはいつほんのくだ（三首目）、はやや平たく表記され、そのままに緊張感が緩んでいった経過か。

消化器系に不安があり、検査結果でそれが解消したこと（編集後記）から、安堵すれば、が云われ、天然酵母の、の選択がある。買ふことに勢ひづきて（六首目）の、勢ひづきて、も、また「やうやくに帰り来たりて温めたる南瓜スープとベーグル噛みしむ」のも、心の動きである。食欲でもあれば、食べるといふ行為の日常性が着地点でもある。経過後の歌でもある。

●足場ごとビル一棟が覆はれて音なく人の動く気配す

丸山弘子

ひとつ前の歌より、ビル改修のための足場であることがわかる。ビルやマンションは定期的メンテナンスしなければならぬようだ。近ごろよく見かける光景だが、すっぱりとメッシュ状の覆いで囲われた様子がていねいに表現された。「音なく人の動く気配」との観察が生きている。ただ、次の歌「未だ稚わかきこの百日紅花つきのよくて新築マンションを祝ほぐ」はちよつと不思議な感じ。改修されるビルと新築マンションとは関係がないと思うのだが、百日紅（さるすべり・ひやくじつこう）がなぜ祝うのか謎である。マンションの所有者が誰なのかで違ってくるのではないか。次は、物によって、ふと旅先で亡くなった友人が思いだされた場面の歌。

としどしに落花生の新物送りくれし友を思ふよ旅に逝きたる

●危険とは隣り合はせと思ふ世の玉砂利の道にきしむ玉砂利

結城 文

この世の中は、つねに危険と紙一重のところまで生かされているという感慨。「玉砂利の道」から「玉砂利」に焦点が絞られていき、それが「きしむ」。歯ざしりのような感じもある。内面をふかく掘り下げている作者である。自問している次の歌も同様。

私が私に向かつていふ言葉さがして歩くヒメジオンの原

●夢の中少女と呼ばれ手を取ればそのやわらかさ兎羅綿とろめんのごと

市川茂子

「兎羅綿」の語を初めて知った。大辞林では以下のように説明する。——とろめん【兎羅綿】「〔とろ〕は梵 *ṛ* の音訳。綿花の意」一六世紀に中国から渡来した綿毛混紡織物。日本では兎毛と木綿で織るようになった。兎羅綿。——とろめんの響きが面白く、夢・少女・とろめんの組み合わせがよかった。次の歌は、年齢を重ねるごとに血縁者に似ていく自分を客観視しながら、叔母や母を思い出しているのがわかる。

ウインドーに映るわが顔叔母に似て後ろ姿は母のようなり

●じぶんらを数でかぞえしことなきや四方にバラけゆく水鳥ら

小野澤繁雄

ひとは鳥を見ると、すぐさま何羽いるのかと数えてしまいがちだ。当の水鳥たちは、そんなことには関係なく生きているのに。方々に散って泳いでゆく水鳥から、作者は視点を変えて水鳥の気持ちになった。この転換が面白く、一首としてまとまった。次の歌は乗り継ぎした電車の中であるうか。「つど」は、その都度。若い人が眠ってしまった、こっくりこっくり。隣に座る自分に肩を寄せてくる。それが重い。迷惑なのだが、許容している。よくわかる場面だ。

乗りついでつどに隣は眠る人若き男は重き肩よす